異文化コラボレーション

小特集

Intercultural Collaboration

編集にあたって

01. 機械翻訳を用いた異文化コラボレーション

02. 子供たちの異文化間コミュニケーション

03. 遠隔授業による異文化コラボレーション

04. オフショア開発現場における異文化間コミュニケーション摩擦

小特集

編集にあたって

石田　亨（京都大学情報学研究科社会情報学専攻）

情報通信技術のめざましい進展により，言語や文化的差異を超えて人々の交流が急速に増大し，新たなコミュニケーションと摩擦を引き起こしている．たとえば，海外におけるオフショア開発，国際共同プロジェクトの増大，国内における異業種異分野連携・産官学連携など，事例には事欠かない．特にアジアワイドなコラボレーションは緊急の課題である．

本特集では，FIT2005 の異文化コラボレーションシンポジウムの招待講演をベースに，機械翻訳を用いた異文化コラボレーション，絵文字を用いた子供たちの異文化間コミュニケーション，遠隔講義システムを用いた大学における異文化コラボレーション，オフショア開発現場における異文化間コミュニケーション摩擦を解説する．

石田，内元，山下，吉野氏の「機械翻訳を用いた異文化コラボレーション」は，2002 年の日中韓馬の異文化コラボレーション実験を起点とする一連の機械翻訳の利用経験に基づいている．この実験では，40 名を超える日中韓馬の学生，教員が，母国語を用いてオープンソースソフトウェアの共同開発を行った．コミュニケーションを仲介したのは機械翻訳システムである．2003 年には日中間のブロードバンドを用いた実験も行われている．こうした経験から，機械翻訳の品質の問題，アクセシビリティの問題をユーザの立場から再検討し，翻訳エージェントや言語グリッドなど，これまでにない研究テーマを提案している．

森氏の「子供たちの異文化間コミュニケーション」は，NPO パンゲアの 9.11 を起点とする 5 年間の活動について述べている．国内の複数拠点，ケニア，韓国などの海外拠点を結んで，子供たちのつながりを形成するためのアクティビティを展開している．世界各地に拠点を展開するために，ツールやマニュアルを含むアクティビティパッケージを開発している点が特徴的である．「こえつな（声の綱引き）」と呼ばれるアイスブレークから始まり，「タコ紹介（他のメンバの紹介）」「パンゲアトランプ」「絵文字コミュニケータ」などその独創的な活動には目をみはる．言葉の壁，文化の壁，そして環境の壁を越える子供たちのユニバーサルプレイグラウンドが生まれようとしている．

美濃，村上氏の「遠隔授業による異文化コラボレーション」は，京都大学総合情報メディアセンター（現在，学術情報メディアセンター）と米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校との間の，TIDE プロジェクトと呼ばれる 7 年間におよぶ遠隔授業の経験をまとめたものである．遠隔授業を，言語や文化が異なる 2 つの空間を情報通信技術によって結んだ新たな異文化コラボレーションの場として捉えている．遠隔講義システムやそれを用いた教授法に対して日米の学生が異なった視点で評価していること，遠隔授業のスクリーンから相手側学生の「雰囲気」をつかむのは容易ではないこと，教員と学生の対面での対話がコラボレーションの共通基盤を形成することなどが指摘されている．

西田氏の「オフショア開発現場における異文化間コミュニケーション摩擦」は，職場における異文化間の問題を調査した結果を報告している．協力企業総数は中国，マレーシア，フィリピン，米国など 103 社，回答者総数は 2,555 名におよぶ．本調査では，これまでの文献から異文化間コミュニケーション摩擦を起こすとされている行動を選び出し，ヒントとして回答者に与えることで，過去の体験を思い出させ，長期記憶として貯蔵されているスキーマに基づいて，日本人と現地従業員の間の摩擦の実態を明らかにしている．その結果，日本人と現地従業員の文化の相違の感じ方には大きな差があることなどを明らかにしている．

上記の 4 つの解説に共通するのは，筆者たちの長期に渡る異文化環境での活動経験である．こうした経験の多くは，科学技術論文の形にまとめることが難しい．解説特集という形をとることにより，経験と知識の蓄積に資することを願う．

編集担当：石田　亨，井佐原均，乾健太郎，内元清貴，宇津呂武仁，片桐恭弘，山下直美，吉野　孝．

（平成 18 年 2 月 6 日）